

主 題：ユダの頌栄 ③
聖書箇所：ユダの手紙 25節

新約聖書ユダの手紙をお開きください。きょう私たちはこの最後の25節をご一緒に学んでまいります。ドイツ改革派教会の中で、最も優れた賛美歌作者と呼ばれていたヨアヒム・ネアンダー。彼は詩篇103篇のみことばを要約して賛美歌9番を書きました。

ちからの主をほめたたえまつれ
わが心よ、今しも目さめて、
たてごと かきならしつ、
御名をほめまつれ。

さかえの主を ほめたたえまつれ、
世をこぞりて かしこみあがめよ。
ひかりにいます わが主を
とわにほめまつれ。

神様をほめたたえ続けていく。神様に賛美を、礼拝を捧げ続けていく。これは私たちに与えられた大きな特権です。被造物はその創造主なる神をほめたたえる。まさに私たちはそのために造られ、そのために生かされているとも言えます。だから自然界はこの神のすばらしさをたたえ続け、そのすばらしさを証し続けています。詩篇19：1に「天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる。」と記されています。つまりこのみことばが私たちに教えるのは、神がお造りになったこの天は、創造された神のすばらしさを世に証しているということです。天空にちりばめられた数々の星、太陽、月、惑星、これらに見るその美しさ、またそこに存在する不思議さはそれらをお造りになった神の美しさを、その知恵を証するものです。

旧約聖書の中にアモス書というのがあります。ちょうど今から約2700年以上前に活躍をしている預言者の一人アモスが非常に興味深いことを私たちに教えてくれます。アモス5：8に「すばる座やオリオン座を造り、暗黒を朝に変え、昼を暗い夜にし、海の水を呼んで、それを地の面に注ぐ方、その名は主。」と書かれています。まずアモスはこういった星座をお造りになったのが神だということを明らかにします。「すばる座」や「オリオン座」という名前が出てきます。ヨブ記9章には「牡牛座」、「オリオン座」、「すばる座」、「南の天の室」を設けたことが記されています。また同時にこのみことばは、神は季節を造られたお方であることも教えます。「オリオン座」が冬の代表的な星座だということを我々は知っています。「すばる座」というのはプレアデス星団と言われ、秋や冬、春に見られます。恐らくアモスは、冬の星があるようにそれ以外の季節の星が存在していることを伝えます。私たちは冬には毎年同じ星座を見ます。夏にも毎年同じものを見ます。そのすべては神がお造りになったものだと教えるのです。また朝に昼そして夜をお造りになったのが神だとアモスは言います。「暗黒を朝に変え、昼を暗い夜にし」と書いてあります。夜が朝へ、昼が夜へと変わっていく。一日の様子、一日の時間の経過です。つまりこうして神はその朝を昼を夜をお造りになったお方であると。

この5：8の最後のところには「海の水を呼んで、それを地の面に注ぐ方、その名は主。」と書いてあります。水の循環の話です。水が蒸発し、それがまた雨となって地に戻ると。そのすべてのことを創造されたお方が神なのだ。このように神がお造りになったものは、それらをすべて造られ、司っておられる神がおられることを明らかにします。イザヤは40：26で「目を高く上げて、だれがこれらを創造したかを見よ。」と言っています。我々が神のお造りになったものを見る時、確かにそこにそれらをお造りになったお方がおられることに気づくのです。彼がお造りになったこのすばらしい自然界によって私たちは創造主のすばらしさを知り、驚かされます。確かに自然界は神のすばらしさと神の偉大さを私たちに証します。

また、自然界だけではなく天使たちも神のすばらしさを証して、神をたたえていると言います。詩篇29：1-2に「力ある者の子らよ。主に帰せよ。栄光と力とを主に帰せよ。御名の栄光を、主に帰せよ。聖なる飾り物を着けて主にひれ伏せ。」とあります。1節に出てくる「力ある者の子らよ」と書かれているのは天使たちのことです。「栄光と力とを主に帰せよ」の「主に帰せよ」という命令は三度繰り返されています。つまり天使たちに対して神の栄光とその御力をほめたたえなさい、神を礼拝しなさいと命じるのです。なぜ

なら彼らはそのすばらしさを知っているからです。そして黙示録の中に天使たちが主をたたえている様子が記されていました。黙示録5：11-12、「また私は見た。私は、御座と生き物と長老たちとの回りに、多くの御使いたちの声を聞いた。その数は万の幾万倍、千の幾千倍であった。」そして彼らが神をたたえるのです。「彼らは大声で言った。『ほふられた小羊は、力と、富と、知恵と、勢いと、誉れと、栄光と、賛美を受けるにふさわしい方です。』」。確かに天使たちもこの神のすばらしさを覚え、その偉大な神をたたえていることが記されています。神によって造られたものたち、被造物は創造主なる神をたたえ続けるのです。

☆主がほめたたえられる理由

そこで、この救いにあずかった者たちも同様にこの神をほめたたえることが必要だとユダは最後の24-25節に頌栄という形で記しました。既に私たちが見て来たように、こういった理由でこの神はほめたたえられ続ける必要があると、この神がほめたたえられるふたつの理由をユダは教えてくれています。

A. 主のみわざのゆえに 24節

24節に、このお方は称賛に値するみわざをなされた、そのみわざゆえに私たちはその神をほめたたえ続けるのだと。25節には、この方は称賛に値するお方ゆえにどんなみわざをなさらなかったとしても称賛に値するお方なのだ。それゆえに私たちはこの方をたたえるのだと、ユダは記しています。

1. 救いのみわざのゆえに

我々はもう既に24節から称賛に値するみわざについて学んできました。彼が神様のみわざにおいて何をたたえているかという、救いのみわざです。そのために24節でこの救いに関して大切な真理をユダは明らかにしました。

1) あなたの信仰を守る

一つ目は、神はあなたの信仰を守るということでした。教会の中に偽りの教師たちが入り込んで来て間違った教えを教会の中にもたらしてきた。そこでユダはみことばの真理を妥協することなく、与えられた信仰のために戦うようにと教会の愛する兄弟姉妹たちを勧めたのです。みことばにしっかり立つように、正しい信仰にしっかり立って生きて行くようにと彼らを励ましたのです。

◎ 救いの永遠堅持

それを教えた上で、ユダは救いの永遠堅持——あなたたちが神からいただいた救いというのは、絶対に失われることがないことを教えてくれました。神によって救われた人はその救いを絶対に失うことがない。一度救われたならばその人は永遠に救われているということです。今あえて主によって救われた人の場合と強調しました。なぜかという、自分は救われていると思いながら実は救われていない、そんな人たちがいるからです。でも神があなたを救ってくださったならば、その救いは永遠のものです。どんな背教の教えが入り込んできても、あなたは真理から離れて、間違った教えを信奉し、従っていく、主を捨てるということなど絶対にあり得ないということを教えたのです。

なぜなら全能の主があなたを守ってくださる、その方があなたのために取り成しの祈りを捧げてくださっているからです。私はこの救いを絶対に失うことがないというすばらしい約束をみことばは私たちに与えてくれます。

2) 完全な者として神の御前に立たせてくださる

二つ目にユダは、「傷のない者として、大きな喜びをもって栄光の御前に立」つことができると言っています。つまり聖さ正しさにおいて完全な者として神の前に立つことができることの約束です。与えられた救いは完全なものです。それでいて私たちはまだこの肉というものを持って生きています。我々はもう天国が約束されました。でも私たちは地上にいて、この罪との葛藤や罪に対する敗北を経験しながら生きています。でもそれは永遠に続かない。我々はそこから解放され栄光のからだをいただくのです。そして聖さにおいても正しさにおいても完全な者にされて、我々は喜びを持って神の前に立つと。

この24節の頌栄の中で、ユダは、神はあなたや私に一方的な神の恵みによって救いを提供してくださったと教えます。そして与えられた救いを神が守ってくださる、救いの保護です。神ご自身が支えてくださる。あなたがその救いにしがみついているのではない、神があなたを永遠に守ってくださるのだと。

3) 救いの完成

三つ目に救いの完成です。罪からの完全な解放を経験する時がやってくるということです。

ユダはこれらのことを記して、ゆえに私たちはこのすばらしい偉大な神をほめたたえ続けていこうと教えます。そういうことを思っていたのはユダだけではない。旧約聖書のダビデも同じことを言います。詩篇40：5に「わが神、主よ。あなたがなされた奇しいわざと、私たちへの御計りは、数も知れず、あなたに並ぶ者はありません。私が告げても、また語っても、それは多くて述べ尽くせません。」と。神様、あなたがなしてくださったこと、それが余りにも多過ぎてそのすべてを語り尽くせません。神は私たちのようなものを罪から救い出してください、神の子どもにしてください、神が私たちとともにいてください、弱い愚か

な私たちを日々助けてくださり、必要なものを与え続けてくださり、そしてどんな時でも神は私たちに慰めと励ましを下さり、そして私たちを力づけてくださる。こんな私たちを使って神の栄光を現してくださると。その祝福の中に私たちを招いてくださったことを覚えている人たちは、この方に感謝を忘れていない。この偉大な神様をたたえ続けていこう。主よ、あなたは偉大なお方ですと、そのように彼らは主をほめたたえながら歩み続けたのです。まずユダがそのことを読者たちに勧めるのです。主がなされた偉大なみわざゆえにこの方をほめたたえ続けるのだと。

B. 称賛に値するお方ゆえに 25節

25節に、まさにこの方は称賛に値するお方ゆえに私たちはこの方をたたえ続けていこうと言うのです。25節「すなわち、私たちの救い主である唯一の神に、栄光、尊厳、支配、権威が、私たちの主イエス・キリストを通して、永遠の先にも、今も、また世々限りなくありますように。アーメン。」とあります。この25節の初めのところに、この神は称賛を受けるにふさわしいお方であるということを書いてあります。そしてこの方をほめたたえる二つの理由をここに挙げています。

1. この方は唯一の神

この方が唯一の神であり、私たちの唯一の救い主だから、私たちはこの方に称賛を捧げるのだと。この方はそれを受けるにふさわしいお方だと教えています。原語では「唯一」という形容詞が文頭に出てきていて、25節は「唯一」ということばで始まります。先ほども見たように、唯一の神だからというのがユダがこの神をほめたたえる理由です。聖書を見ると、神というお方がどういってお方なのかを教えてください。その中の一つはこの方は唯一だということです。

イザヤが45:21に「わたしのほかに神はいない。」と言っています。私だけが神なのだと、神ご自身がお告げになっておられる。ハバクク2:18-19には「彫刻師の刻んだ彫像や鑄像、偽りを教える者が、何の役に立とう。物言わぬ偽りの神々を造って、これを造った者が、それにたよったところで、何の役に立とう。ああ。木に向かって目をさませと言ひ、黙っている石に向かって起きろと言う者よ。それは像だ。それは金や銀をかぶせたもの。その中には何の息もない。」と記されています。みことばははっきりと偶像の愚かさを教えています。人間が作ったものが一体「何の役に立とう」とか。口がついていても物を語るののできない存在にどんな力があるのか。そんなものに頼ったところで一体何の役に立つのか。木や石に向かってこんなことを行ってくださいとたと言ったとしても、それは不可能だ。なぜかという、彼らの中には息がないと。彼らは死んでいるからです。死んでいる者たちに何ができます？聖書の教える神はいのちを持っておられる方です。いのちの源です。この方がいのちをお与えになる。だから私たちも生きる者になる。この世の中にいのちある者はそのいのちの源である神によって造られたのです。ハバククは人間が造った物には息がない、死んでいると言います。いのちを持たないものは神ではないのです。神になることさえもできない。これが偶像だと。こうしてハバククはいかに人間が作ったものたち、人間が神と呼んでいる偽りの神々と聖書の教えるまことの神との違いを明らかに示すのです。

パウロは「私たちは、世の偶像の神は実際にはないものであること、また、唯一の神以外には神は存在しないことを知っています。」と言っています。パウロはまことの神と偶像の違いを非常にクリアに、明らかにしています。世の偶像の神は実際にはないものであると、彼らは神ではないからです。「唯一の神以外には神は存在しない」、神はおひとりだ、この方以外には神は存在していないと言っているのです。1コリント8:4です。ですから、まずこの神こそが唯一まことの神ゆえに私たちはこの方を心から賛美する、この方をたたえるのだとユダは言うのです。

2. この方は唯一の救い主

二つ目の理由はこの方が唯一の救い主だからです。25節「すなわち、私たちの救い主である唯一の神に」とあります。普通「救い主」と言われて私たちがすぐ考えるのは主イエスです。確かにイエスのことを「救い主」と呼んでいる箇所は新約聖書の中に16回出てきています。しかし、ここでは父なる神のことを「救い主」と呼んでいます。ここだけではないのです。新約聖書の中には父なる神を「救い主」と呼んでいるところが8カ所あります。ここでユダが言いたかったことは、罪人の救いには三位一体の神が関わっているということです。父なる神は子なる神、主イエス・キリストをこの地上に遣わされて彼を十字架へと追いやっていったのです。神のみこころでした。子なる神、主イエス・キリストは、あなたの罪を負って十字架で身代わりに死んでくださった。そして聖霊なる神は罪人の心に働き、その人に罪を悟らせ救いへと導いてくださる。あなたが救いに預かるために、こうして三位一体の神が、唯一まことの神が働かれたということのをいま一度ユダは教えるのです。

イザヤ43:11は「わたし、このわたしが、主であって、わたしのほかに救い主はいない。」、ただひとりだけだと言っています。確かにこのイザヤ書のみことばは、イスラエルが神によって敵から救い出されたことを教えています。でもそのことによって、このイスラエルの神こそがまことの神であるというメッセージを人々に発したのです。当時、神と呼ばれるいろいろな存在がありました。しかしこの聖書の

神、イスラエルの神に勝利できる神々はどこにも存在していませんでした。過去に存在していなかっただけではなく、今もそしてこれから先もそんな存在を我々は見ることができません。誰も彼のなさろうとすることを覆すこともそれに逆らうこともできない。聖書の教える神は唯一まことの神であり、そして人間に、罪人に一番必要な救いをもたらすことのおできなる唯一のお方であると。

◎ どのようにして救いを完成されたのか

25節に「私たちの救い主である唯一の神に」と書かれています。ここでユダは、神がこの救いというものがどのようにして完成されたのかを記すのです。実はそれがこの25節に書かれています。25節を直訳すると「唯一の神、私たちの救い主。私たちの主イエスによって栄光、尊厳、支配、権威がすべての時の前にも、今もまたとこしえにありますように、アーメン」となります。ことばの配列が違います。

「私たちの救い主である唯一の神に」、そしてその後に「私たちの主イエスによって」と、「イエス・キリストを通して」の「通して」という接続詞は「よって」と訳されますが、これは完全な救いが主イエスによって備えられたということを明らかにしています。イエスの十字架の死によって、罪の赦しをもたらす、完全な救いが備えられた、イエス・キリストが完全な救いを備えてくださったと。ヘブル書の著者はこの大切な真理についてこんなふうに記しています。ヘブル1：3「御子は……罪のきよめを成し遂げて、すぐれて高い所の大能者の右の座に着かれました。」とあります。非常に大切なことを我々に教えてくれています。イエス・キリストはこの地上に父なる神のみこころによって送られてきました。そしてイエス・キリストは私たちの罪をきよめるため、つまり私たちを罪から解放するため、救い出すためにです。彼はそれを成し遂げて、「すぐれて高い所の大能者の」、つまり父なる神の「右の座に着かれ」と。これはそこに備えられている椅子に座ったということです。立っているとは教えていない。そこに着かれたのです。なぜ着かれたのか——。イエスがこの世に来られたすべての目的が完了したからです。

つまりイエス・キリストを信じて、またそれプラス何かをすることによって、救いを得るのではない。イエス・キリストは完全な救いを私たちのために備えてくださった。ですからこの世に来られた目的は果たされて、イエスは天に帰って父なる神の右の座に着座されたのです。働きが終わったからです。すばらしい約束です。こうして私たちに完璧な救いが備えられたのです、どんな罪人でも赦される救いが備えられたのです。しかもこの救いのみわざをイエス・キリストはただ一回のみわざで、一回の犠牲で成し遂げてくれた。同じヘブル7：27には「キリストは自分自身をささげ、ただ一度でこのことを成し遂げられたからです。」とあります。何がそこに記されているかという、それまでは動物を捧げなければいけなかった。動物の血は私たちの罪を完全に拭い去ることはできなかったから、人々は毎年この罪を完全に拭い去ってくださる救世主を待ち望んでいたのです。そしてその方が来られたのです。バプテスマのヨハネが見た時に、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」(ヨハネ1：29)、遂にその小羊が来てくださった。そしてその小羊が自分の罪のないいのちを罪あるあなたや私の身代わりとして捨ててくださることによって、その死によって完全な救いが備えられたのだと。ハレルヤですよ。こうして神は私たちのためにすばらしい救いを備えてくださった。ユダはそのことを言うのです。主イエスによって罪人にとっての唯一の救いが備えられたと。だから彼は救い主なのです。イエスという名前は「主は救い」という意味です。でも彼はイエスだけではない、イエス・キリスト、彼は確かに約束されていた救い主なのだ。

そこでペテロが民の指導者や長老や学者たち、また大祭司たちやその一族の前で何を言ったのか聞いてください。「この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人に与えられていないからです。」(使徒4：12)、つまりこのイエス・キリストこそが唯一の救い主だと言うのですが、その後で「天の下でこの御名のほかに(イエスのほかに)、私たちが救われるべき名は人に与えられていない」、つまり救いは神のわざだ。イエスは何となくやって来られ、最後に救い主として死んだのではないのです。この救い主イエスは父なる神がご自身のみこころでもって送ってくださり、そして我々に一番必要な救いを成し遂げてくださった。それを備えてくださった。神はこうしてイエスによって完全な救いを私たちのために設けてくださったのです。だからこの方は唯一の救い主だと教えるのです。

パウロも同じようなことを言っています。エペソ1：7に「私たちは、この御子のうちにあつて、御子の血による贖い、すなわち罪の赦しを受けているのです。これは神の豊かな恵みによることです。」とあります。「御子の血による贖い」、イエス様が血を流し、いのちを捨ててくださった。そのいのちという代価によって、私たちはこの罪の赦しをいただいたと。すべては神の恵みなのだ。私たちの行いによるのではないとユダは私たちに教えます。なぜ私たちはこの神をほめたたえ続けていくのか——。この方は唯一の神であり、唯一の救い主だからです。

確かにイエス・キリストによって備えられた救いというのは、信じるすべての人に完全な救いをもたらすものです。どんな罪人でもイエス・キリストによってその罪を赦していただける。問題はその救いをあなた自身が受け入れているかどうかです。身重のマリアとエリサベツが出会いました。その時にエリ

サベツから祝福のメッセージを聞いたマリアはルカ 1 : 47 で「わが霊は、わが救い主なる神を喜びたたえます。」と神をたたえています。マリアは「わが霊は救い主なる神を喜びたたえます」と言わなかった。もしそうだとしたらひょっとしたらこの女性は神がどんなに素晴らしいお方であるかという知識を持っていただけかもしれない。でも確かにマリアはこのイエス・キリストを信じていたことがわかります。なぜかという、彼女が言ったことは「わが救い主なる神を喜びたたえます」でした。確かにイエス・キリストはすべての罪人にとっての救いの希望です。問題はその方を私の救い主と信じているかどうかです。あなたはどうですか？イエス様はあなたの救い主でしょうか？イエス様はあなたのすべての罪を赦してください、その赦しをいただいているのでしょうか？救いというのは神様との個人的な関係です。

3. 称賛の内容

さて、25節を見ていきましょう。称賛の内容として四つの名詞「**栄光、尊厳、支配、権威**が」と記されています。これらは神がどれほど偉大な方なのかを教えるのです。このすべては神だけに帰属しているものです。

1) 栄光

まず最初の「**栄光**」ということばです。ここでこのことばが使われているのは、まさに神という方は光のように輝いていることを強調するのです。この方のうちには全くけがれがない、光輝いているような存在。パウロは1テモテ6 : 16で「ただひとり死のない方であり、近づくこともできない光の中に住まれ、人間がだれひとり見たことのない、また見ることのできない方です。」と言っています。これが神だと。光の中に住んでおられる。まさに私たちが見ているように、「**栄光**」という、まさにこの方は光輝いているかもしれません。余りにも偉大過ぎて私たちが近づくことができないような。主イエス・キリストが弟子たち3人を連れて高い山に上った時にイエス様の御姿が変わりましたよね。「**御顔は太陽のように輝**いた、「**御衣は光のように白くなった**」とマタイ17 : 2です。イエス様が何をされたのか、ご自分が誰かということ明らかにしたのです。栄光に満ち溢れた神なのです。光輝く神なのです。罪を持っている者が絶対に近寄れない存在なのです。

2) 尊厳

二つ目は「**尊厳**」ということばです。新約聖書に3回しか出てきません。「**尊厳**」と訳されているのはここだけです。あとヘブル1 : 3や8 : 1では「**大能者**」と訳されています。つまりこのことばを使うことによって、このお方は至高のお方であると、御力やその能力において偉大であって、すべてにおいて超越されているお方。この方はたたく厳かで犯しがたい存在だと。まさに王であられるお方です。ただの王ではない王の中の王、そのような存在だと。1歴代誌29 : 11には「**主よ。偉大さと力と栄えと栄光と尊厳とはあなたのものです。天にあるもの地にあるものはみなそうです。主よ。王国もあなたのものです。あなたはすべてのものの上に、かしらとしてあがむべき方です。**」とあります。すべてにおいて優れておられる、だれひとりとして、どんな被造物もこの方に太刀打ちできないような存在。王の中の王、まことの王であられる。

3) 支配

三つ目のことばは「**支配**」ということばです。この世を絶対的に支配しておられる方。ご自分の御力をもってこの世をすべて治めておられる方。それもそのはず、この世は神のものだからです。ですからこの方がなさることはご自分の御力がどのように偉大なものかを示すものです。イエス様がこの地上に来られた時に超自然的なことを何度も繰り返されました。例えば波でも風でも、イエス様が命じると自然界もその命令に従いました。イエス様が命じるとどんな病もそれに従いました。イエス様が命じると、悪霊でさえも服従しました。そしてあのサタンでさえも。そして死までもイエスの命令に従った。死んでいる者に出て来いと言ったら出て来るのです。あのジョン・カルバンがこう言っています。「このことはご自身の目的を成就するための力である」と。神はその力を持っておられる、支配者として何にも屈することも服することもないと。この方は主権者であられ、この方はどんなことでもおできになると。

4) 権威

最後に出て来ることばは「**権威**」ということばです。すべてを支配するとか治める力も権威もある。つまりこの方はご自分のみこころのままにすべてのことを行う権利を持っているということです。だれかから神様、違いますよとか、それは間違っていますよと、そんなことはあり得ないと。この方はご自分が望まれることを行う権利があるのです。できるだけではないのです。それを行う権利を持っていると教えているのです。このことばは新約聖書の中で102回も出てきますが、皆さんもよくご存じの不思議なところで使われているのでその箇所を見てみたいと思います。使徒5 : 3-4です。あのアナニヤとサピラの話です。アナニヤにサピラという名前の妻がいました。彼らは自分たちの持ち物を売って二人で同意した上でその一部を残しておいて、これが売った総額ですと言ってうそをついた話です。ですから3節でペテロは「**アナニヤ。どうしてあなたはサタンに心を奪われ、聖霊を欺いて、地所の代金の一部を自**

分のために残しておいたのか。」と言いました。土地を売っていながらうそをついた。全額だと言いながら一部は自分のために残しておいた。けれども、我々はこれを売りました、代金はこれだけでした。この一部は私たちのところに残させてください。あとは捧げますとすればよかったです。問題はうそをついたことです。さて4節「それはもともとあなたのものであり、売ってからもあなたの自由になったのではないか。」この「自由」ということばにマークがついています。脚注を見ると「直訳『権威のうちにある』」と書いてあります。この「自由」ということばが今私たちが見ている「権威」ということばです。何を言っているかということ、アナニヤとサツピラは自分たちに権利があったのです。売ったものをどうするかは自分たちが決めればよかったです。自由があったのです。ここで「権威」ということばを使ったユダが何を教えたかったかということ、神はご自分が望むことを行えるということです。神にはその自由があります。神がこういうことを起こそうと思ったら神にはそれができるのです。神であられるからその自由を持っておられるのです。

こうしてユダはこの四つの名詞を通してこれが神なのだ、神とはこういうお方なのだということを明らかにしたのです。

4. 永遠にほめたたえ続ける

そして、この賛美を私たちがいつ捧げるのかが最後に出てきます。「永遠の先にも、今も、また世々限りなくありますように。アーメン。」と続きます。まず「永遠の先」と書いてあります。この「先」ということばは「前に」ということです。つまり永遠のその昔、前からということ。「今」というのは現在のことです。そして「世々限りなく」というのは永遠の未来において。つまり永遠の昔から、今、そして永遠の未来に至ると言っているのです。つまり神様には時間というのがありません。私たちには過去や現在や未来があります。でも神にはそれがない。言いたいことは永遠から永遠にと。よく神様がいつ生まれたのかという質問をする人があります。神様に始まりもないし終わりもない。神という方は永遠から永遠に存在されている。それが神だと聖書は言っているのです。ですからユダが言うことはその永遠の神がとこしえに、永遠にほめたたえられ続けますように。過去もそうだったように、今もそうであるように、これからも、永遠に存在なさる方が神です。ヘブル13:8に「イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも、同じです。」とあります。永遠から永遠に至るまで変わらないということです。ですからこの最後の頌栄の中でユダは、永遠から永遠に存在される神に被造物が賛美を捧げ続ける、この方をほめたたえ続けるようにと言うのです。

最後に「アーメン」ということばが出ています。当然ユダはそう言ったでしょう。なぜならこの「アーメン」というのはそのとおりで同意を表すことばです。ユダはそのことを望んでいし、願っていました。彼は自分が生きている間、このすばらしい神をほめたたえ続けていきたい。当然彼が期待したのはその手紙を読んだすべての信仰者がアーメンです、そのとおりで、我々もそれに同意する。この神だけに栄光がとこしえにありますように、この神だけがとこしえにほめたたえられ続けますようにと。

このメッセージはあなたに対する問いかけでもあるのです。何となくあなたはこのみことばと距離を感じてしまっているかもしれない。でも今私たちが見てきたのは、この救いにあずかったあなたや私が時代がどの時代であろうと、場所がどこであろうと、救いにあずかった私たちが神の前になしたいことではないですか？救いにあずかったあなたの内側からその思いがわき上がってきませんか？だから皆さんこの場におられるのでしょうか？日々の生活で神をほめたたえ続けていこうとして。でも私たちは週の初めの日にこうして兄弟姉妹がともに集まってこの方を一緒になってほめたたえる。その思いを持って皆さんがこの場に集まって来られたと信じます。つまりあなたの中にはこのユダが言っている、この方だけがほめたたえられますように、アーメンと。それが私が望んでいることです、そしてあなたがそれを望んでおられることを期待します。すべての被造物はこの神をほめたたえるために造られたのです。救いにあずかった私たちはそのために生かされているのです。我々の生きている目的は、この神のすばらしさを世に証するためです。

そこで、この頌栄の最後にアーメンとありますが、あなたはここで語られた内容に同意しますか？あなたは本当に神だけに栄光があるように、この方だけがほめたたえられ続けることを心から同意しますか？信仰者だったら「はい、そのとおりで」、「アーメンだ」と言われるでしょう。ではもう一つ言います。神があなたや私に期待していることは、ただことばでアーメンと言うだけではないのです。そのように生きることです。神が喜んでくださることだけを選択して生きていくことです。神をほめたたえながら生きて行くことです。あなたや私が今こうして生きているのは、この偉大な神がこのようすばらしい救いを成し遂げてくださり、そして存在されている唯一まことの神がほめたたえられ続けるためにです。ことばではない、我々の生き方をもってそのことを証するのです。救いにあずかったことを我々はすべての人々に知ってもらいたいから、その喜びを持って、感謝を持って生きていくのです。神があなたや私に問われていることは、あなたはこの救いにあずかったことを感謝していますか？あなたはこの世にあ

なたを造ってくださった創造主なる神がおられることを知って、その方をたたえながら生きていますか？その方に感謝を捧げながら生きていますか？あなたは何のために生きているのですか？あなたは何のために日々を過ごしているのですか？この神のすばらしさを証するために生きているのか、それともそれ以外の目的のために生きているのかです。ユダは言うのです。私はこの神のすばらしさを証するために生きている。この神のすばらしさをほめたたえながら生きている、アーメンと。読者たちも同じように、私たちもそうだ、そのように私も生きていきたいと。そしてあなたにも同じことを問いかけています。

あっという間に時間は過ぎていきました。これまで過ごしてきた時間よりも残された時間の方が短いことを多くの方は知っています。またいろいろなことが起こって、私たちだれしも明日がどうなるかわからないことを教えてくれます。過去はもう取り戻せません、でも今だったら私たちはユダが求めたように、この神をほめたたえる歩みをなすことができます。神の恵みを覚え、この私たちの神こそが唯一まことの神であることを覚え、この神のすばらしさが証されるために生きて行くのです。私はそれに同意します、アーメンです。あなたはいかがでしょう？もし神様があなたの心に住まわってくださっているなら、主よ、どうか私はその導きに従って生きていきたい。あなたをほめたたえるために、あなたのすばらしさを証するために、あなたをたたえながら生きていきたい。ですから主よ、私を助けてください。その祈りを持ってきょうから歩むことです。そのために造られ、そのために救われ、そのために生かされたのです。その目的に従って、この偉大な神様のすばらしさだけが現されることを期待して信じ、みずから委ねて従っていきましょう。主に服従すること、それがこの神の栄光を現す生き方です。そのように歩んで、私たちのすばらしい神を人々に知っていただきましょう。